

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(51)

黒 + 微 = 黴

タモツ君のおばあさんの家です。タモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。

「おじいちゃんに教わったって、タモツは黴雨の「黴」という字をしっかりと書いていましたけど、あまりなじみのない字ですよね。」

「常用漢字表にはありませんね。でも、バイキンのバイですから、なじみがないわけでもないでしょ。」

「あ、バイキンのバイですか。でも、へんな字ですね。どうしてバイなんて読むのか。」

「ああ、そうね。バイじゃなく、同じバ行のビだったら、どう？」

「ビ？ そうか。微生物の「微」が音符なんですね。片仮名のルのように見るところが意符の「黒」になっているんですね。」

「そう。さすがタモっちゃんのお母さん。音符の「微」の一部がなくなっているのね。」

ばい
黴



【編集部：注】

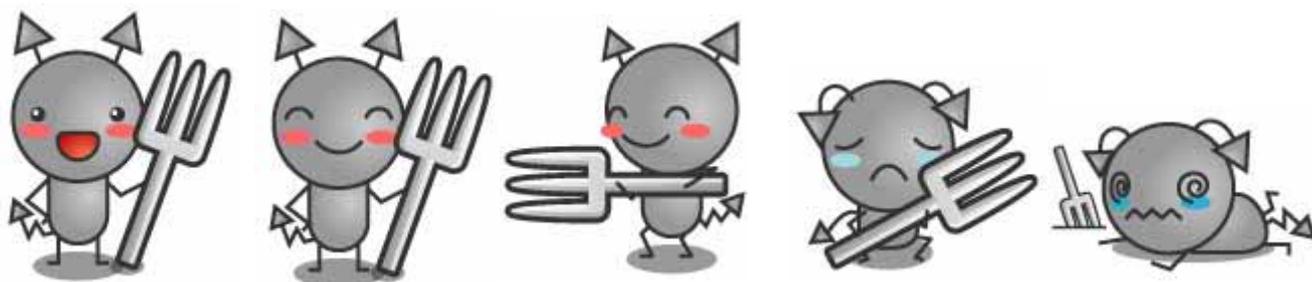
・音符(おんぷ)...漢字の形声文字で、字音を示す要素。

例えば「惜」の字では「昔」の部分。

・意符(いふ).....漢字の構成要素のうち、意味を表す部分。

「語」における「言」、「編」における「糸」など。

(広辞苑 第六版より)



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(52)

でんでんむしむしかたつむり

今日も雨です。サユリちゃんがお父さんと犬の散歩で近くの公園に来ました。雨の中、アジサイが元気いっぱい咲いています。

「あ、でんでん虫がいる！」

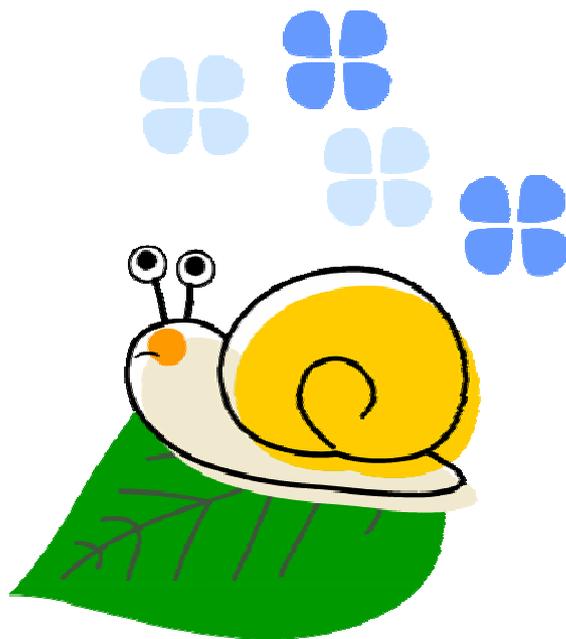
「でんでん虫さんも楽しそうだね。サユリは「でんでんむしむしかたつむり……」って歌、知ってるかな。」

「知ってる。「角^{つの}出せ、槍^{やり}出せ、頭出せ！」っていうのしょう？」

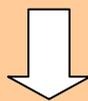
「そう。その「でんでん」って、どういうことだかわかる？」

「でんでん虫の「でんでん」でしょ。」

「そりゃそうだけど、じゃどうして「でんでん虫」という名前がついたのかわからないだろ。昔は「出む、出む。」だったんだ。「出よう、出よう。」って誘っているんだよ。」



出む 出む



でんでん



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(53)

舞え舞え かたつむり

「おばあちゃん、サユリちゃんが言ってたけど、でんでん虫の「でんでん」って、「出よう！ 出よう！」って
いうことなんだってね。」

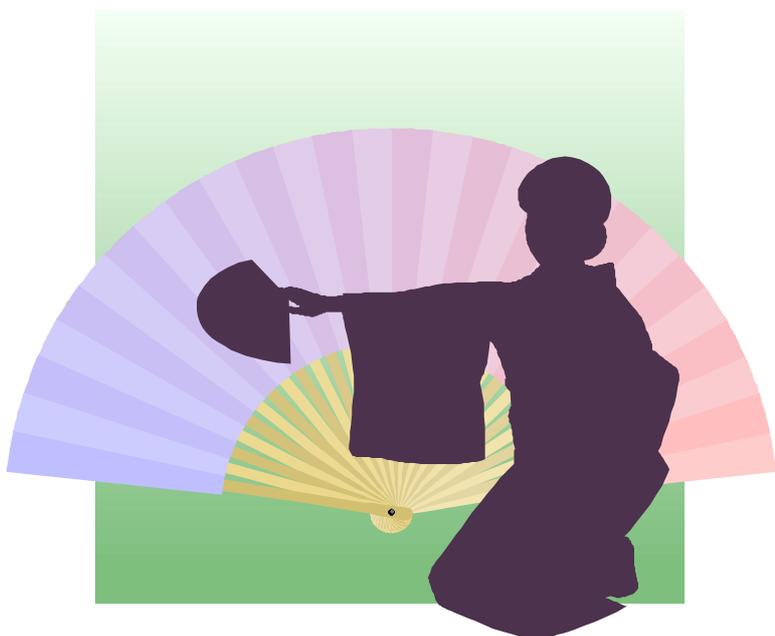
「そう。でんでん虫のことを「まいまい」っていうところ
もあるのよ。これも、「舞え！舞え！」って言ったから
なの。」

「「舞え」ってどういうこと？」

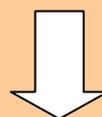
「そうねえ、「踊れ」ってことかな。昔、お侍さんが戦っていたところに、子どもたちが歌った歌に「舞え
舞えかたつむり」というのがあるの。でんでん虫がじっと動かないでいるときに、「動け！動け！」っ
てかけ声をかけたのね。それが「舞え！舞え！」なの。」

「「舞え」って、「動け」ってということなんだね。」

「「踊る」は跳びはねるけど、「舞う」はゆっくりと美しく動くの。」



舞え 舞え



まいまい

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(54)

虫さんころころ、ごろごろ青虫

タモツ君の妹のエミちゃんは四歳になりました。お母さんとおばあさんの家に来ています。庭で草花の手入れをしているおばあさんのそばで遊んでいます。

「ころころ、ころころ、虫さんころころ。」

「あら、エミちゃんはだんご虫を見つけましたね。」

「おばあちゃん、これ、だんご虫？」

「そう。ころころ虫さん、だんご虫。」

「お義母さん、ムベの木に大きな青虫がいましたよ。ほら。」

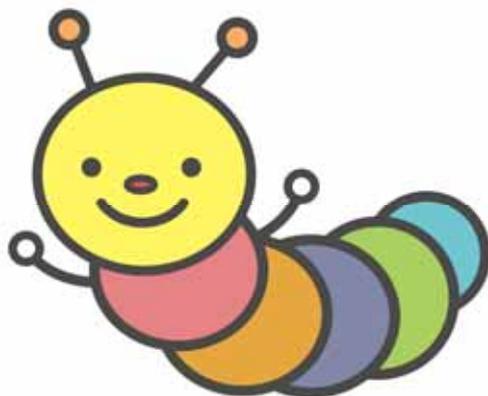
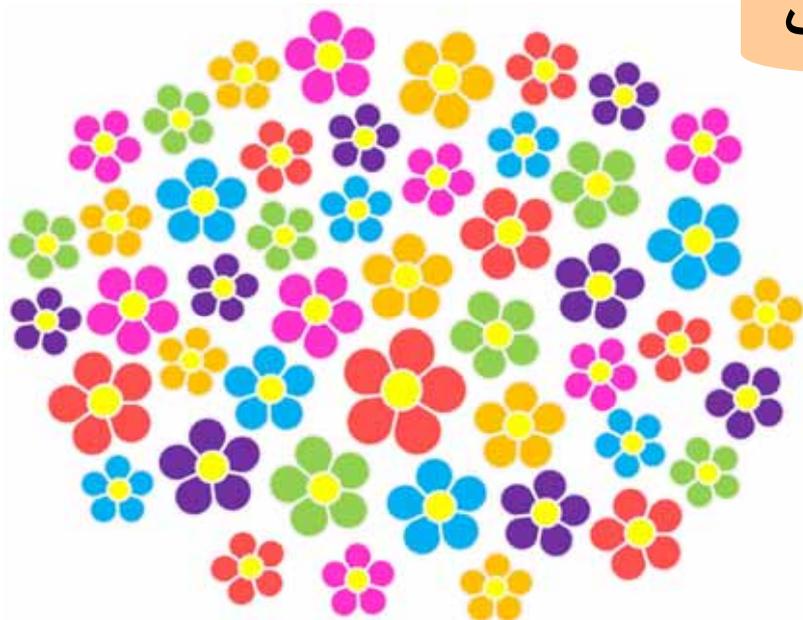
地べたに^{ほう}抛り出されたのは、7センチメートルほどの大きさの青虫です。

「なんの幼虫かしら。ずいぶん大きな青虫ですね。」と、おばあさん。

「ごろごろ青虫、おっきな虫さん。」と、エミちゃん。



ころころ / ごろごろ



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(55)

「ころころ」と「ごろごろ」

おばあさんの家の縁側で、タモツ君のお母さんとおばあさんが話しています。エミちゃんは、庭で遊んでいます。

「エミちゃんは、どんどん大きくなりますね。ことばもしっかりしてきて……。」

「でも、まだ「おっきな」なんて言います。」

「それでいいのですよ。お母さんがしっかりしているから、小さなだんご虫は「ころころ」、ごろんとした大きな青虫は「ごろごろ」と、言い分けられるではありませんか。」

「あら、「ころころ」と「ごろごろ」は、そんなふうに使分けられるのですか。」

「そう。「からから」と「がらがら」、「さらさら」と「ざらざら」、「たらたら」と「だらだら」、「はらはら」と「ばらばら」なんかでわかるように、清音は、小・軽・鋭・弱・美、濁音は、大・重・鈍・強・醜の感じになるのね。」

小・軽・鋭・弱・美

ころころ
からから
さらさら
たらたら
はらはら



大・重・鈍・強・醜

ごろごろ
がらがら
ざらざら
だらだら
ばらばら



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(56)

「はらはら」「ばらばら」「ぱらぱら」

タモツ君のお母さんがおばあさんと話しています。

「先日、エミが「ころころ」と「ごろごろ」を使い分けていることから、清音と濁音とでは小大・軽重・鋭鈍・弱強・美醜の感じの違いになるって教わりましたけれど、帰ってから気になったのが、八行の半濁音はどうなのだろうってこと。」

「あらあら、それは大変。「花びらがはらはらと散る」、「小石がばらばらと落ちてくる」、「雨がぱらぱらと降ってきた」。こんな文を作ってみると、感じがわかりませんか。」

「なるほど。ふらふら歩く、ぶらぶら歩く、ぷらぷら歩くって言うのと、「ぷらぷら」って、ちょっと滑稽な感じがありますか。」

「そうね。涙をほろほろ流す、ぼろぼろ流す、ぼろぼろ流すだと、やはり「ぼろぼろ」が俗っぽい滑稽な感じになりますかしら。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(57)

「緑ヶ丘三丁目」

小学2年のタモツ君の同級生のサユリさんが今日もお父さんと犬の散歩です。

「お父さん、このへんは緑が丘だよな。」

「そうだね。」

「電信柱に「緑ヶ丘3丁目」って書いてあるでしょ。どうして

「ヶ」を「が」って読むの。」

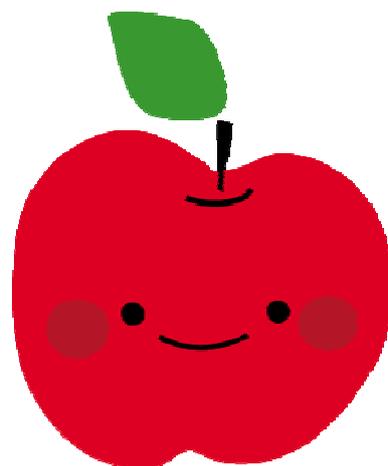
「ああ、「ヶ」は「か」なんだ。「一ヶ月」とか「二ヶ月」とか。

この「ヶ」が「が」になるのじゃないかな。お正月の一日から三日までを「三ヶ日」と書いて「さんがにち」っていうから。」

「そうなんだ。「ヶ」は「か」なんだ。」

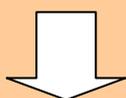
「そうだ。「こ」になることもある。「りんご1ヶ」って書いてあるのを見たことがないか。」

「あるある。「ヶ」は「か」とか「が」とか「こ」とかになるんだ。」



りんご1ヶ

ヶ



か / が / こ



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (58)

「どうして「ケ」を「が」と読むの」

今夜は、週に一度のおじいさん・おばあさんと一緒に夕食の日です。小学2年のタモツ君がおばあさんに言いました。

「サユリちゃんが言ってたけど、緑ヶ丘の「ヶ」は「が」だけど、「一ヶ月」のときは「か」、
「りんご1ヶ」のときは「こ」って読むんだって。どうしてかたかなの「ヶ」を「が」とか
「か」とか「こ」とかって読むの？」

「そうね。かたかなの「ヶ」に見えるわね。でも、ほんとうはかたかなの「ヶ」ではないの。
タモっちゃんは、「緑ヶ丘」とか「一ヶ月」とか、「ヶ」がちょっと小さく書いてあるのを見
たことがないかな。これは、「箇」という漢字の代わりに使う「个」という漢字なの。「箇」
のタケカンムリの左側だけを書いたのがこんな漢字になったのかしら。もともとは「箇」だ
から、「か」「が」「こ」と読むの。」

箇 ⇒ 个 ⇒ ケ



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(59)

九月九日は なんの節句？

小学2年のタモツ君の隣の席はサユリさんです。

「タモっちゃん、九月九日はなんの節句か知ってる？」

「知らない。三月三日が桃の節句、五月五日が端午の節句というのは知ってるけど……」

「サユリも知らなかった。先週の木曜日にお父さんのお兄さんの愛知のおじさんが来て、泊まったの。そのとき、九月九日は菊の節句だって教えてくれたの。」

「キクの節句？」

「そ。お花の菊の節句。前の晩に菊の花に真綿をかぶせておいて、朝、真綿にしみこんだ露で顔を拭くと、美人になるんだって。男の人は、九月九日に菊のはなびらを浮かべてお酒を飲むと、長生きするんだって。」

「そうなの。おじいちゃんに教えてあげなくちゃ。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ(60)

ちょうよう 重陽の節句

「おばあちゃん、おじいちゃんは？」

「あら、タモっちゃん。いらっしゃい。学校の帰り？ お生憎さま。おじいちゃんあいくは、出掛けているのよ。」

「なあんだ。おじいちゃんはいないの。サユリちゃんにきいたんだけど、九月九日は菊の節句で、菊のはなびらを浮かべてお酒を飲むと長生きするんだって。」

「そうなの。ありがとう。おじいちゃんにお伝えします。重陽ちょうようの節句のことでタモっちゃんが学校の帰りに寄ってくれましたって。」

「チョーヨーじゃないよ。菊の節句だよ。」

「あら、そうね。中国では、奇数が陽で、偶数が陰なの。九は陽の一番大きな数なの。その九が重なるから、九月九日のことを重陽っていうの。」

よう よう ちょうよう
陽 + 陽 → 重陽



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (61)

珍味「このわた」

夕食時です。小6のリサさんがお母さんに言いました。

「この海苔^{のり}みたいなどろどろしたの、何？」

「このわた。この間、富山のおじさんがおみやげにくださったの。」

ごはんにつけて食べたリサさんが言いました。

「へんな味！」

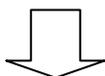
ビールを飲んでいたお父さんが言いました。

「おいしいだろう？ からすみと並んで、酒のさかなとしては高価な珍味なんだよ。」

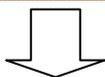
「これ、塩辛^{しおから}みたいだけど、なんなの？」

「そう。これはね、なまこの腸の塩辛なんだ。「こ」というのは「なまこ」の「こ」、「わた」というのは「はらわた」の「わた」。だから、「海鼠腸」と書くんだよ。」

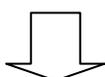
なまこ ちょう
海鼠十腸



なまこ十はらわた



「こ」の「わた」



このわた
海鼠腸



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (62)

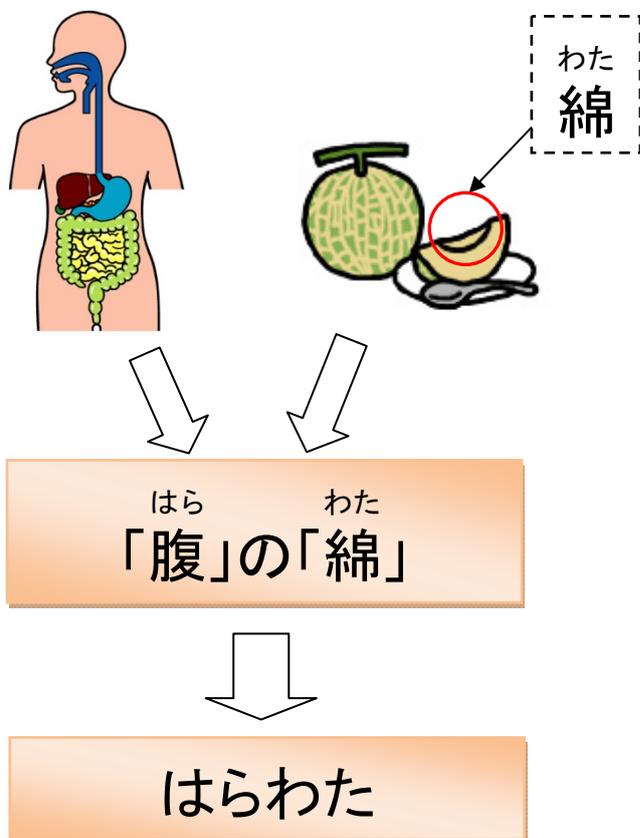
「腹」の「綿」が「腸」

夕食時です。小6のリサさんとお父さんの会話を聞いていたお母さんが言いました。

「なまこを「海鼠」って書くのは、わかるけど、どうして「腸」が「わた」なのかしら。」
「うーん、どうしてかなあ。「腸」の訓が「はらわた」だし、「このわた」の「わた」は「はらわた」の「わた」だから、書くとすれば「はらわた」の「腸」で、読むときには「わた」になるんじゃないのかなあ。」

「お父さん、「腸」の訓が「はらわた」なの？」と、リサさん。

「うん。常用漢字表には訓が示されていないけど、音が「チョウ」、訓が「はらわた」。日本語では内臓に名前をつけていない。心臓も肺臓も、肝臓・脾臓・胆嚢・腎臓・食道・胃・小腸・大腸……、みんな漢語を借りている。かぼちゃとかメロンの種のあるところを「綿」というように、おなかのなかにある腸を「腹」の「綿」と見たのだからね。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (63)

きろきろと……

算数の授業中です。タモツ君は夢中になって、計算問題を解いています。

「きろきろとへくとでかけてメートルは、でしにとられて、せんちみりみり。きろきろとへくとでかけて……。」

「タモっちゃん、それ、何?」。隣の席のサユリさんが声をかけました。

「え?」

「きろきろと……とかって、さっきから言ってるでしょう?」

「あ。『きろきろとへくとでかけてメートルは、でしにとられて、せんちみりみり』?」

「そう。何? それ。」

「知らない。「メートル」って人のことかな。おじいちゃんがときどき言っているんだ。小さいときに聞いて、歌みたいだなって、覚えちゃった。」



きろきろと
へくとでかけて
メートルは、
でしにとられて、
せんちみりみり

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (64)

メートル法の単位

週に一度の祖父母を交えての夕食時です。タモツ君がおじいさんに話しかけました。

「おじいちゃん、今日、サユリちゃんに聞かれたんだけど、「きろきろと」って歌みたいなのがあるでしょ、あれは、何？ おじいちゃん、よく言ってるでしょ、きろきろとへくとでかけてメートルは……って。」

「ああ、あれか。おじいちゃんの口癖。長さや重さを計るメートル法の単位を覚えることばさ。1000 がキロ、100 がヘクト、10 がデカ、1 がメートル、10 分の 1 がデシ、100 分の 1 がセンチ、1000 分の 1 がミリだ。」

「なあんだ。メートルという人のことじゃなかったんだ。そうだ、センチメートルとミリメートルは教わったよ。それから、デシリットルというのもやったかな。」

「1 リットルの 10 分の 1 が 1 デシリットル、10 デシリットルが 1 リットルだね。」



1000 = キ ロ
100 = ヘ ク ト
10 = デ カ
1 = メートル
10 分の 1 = デ シ
100 分の 1 = セ ン チ
1000 分の 1 = ミ リ

【編集部注】メートル法の単位はフランス語です。メートル *mètre* はギリシャ語「尺度」の意に由来します。kilo は千、hecto は百、dèca は十、dèci は十分の一、centi 百分の一、milli は千分の一。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (65)

七五調のリズム

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんと話しています。

「お義母さん、先日、タモツがおじいちゃんと話していた、「キロキロと」ってことば、どうして、「キロキロ」とか「ミリミリ」とかって、繰り返すのでしょうか。」

「口調ですよ。キロ・ヘクト・デカ・メートル・デシ・センチ・ミリという単位の順番を覚えるのに、覚えやすいように、五七五七七の短歌の形式に整えたのね。「キロキロと」というと、「きよろきよろと」というような感じも出て、おもしろいじゃありませんか。」

「口調ですか。それと、ヘクトやデカなんて、聞いたことがありませんけど……」

「あら。ヘクトはヘクタールのヘクト、デカはデカメロンのデカですよ。」

「そういえば、1 アールが 10 メートル×10 メートルの 100 平方メートルで、1 ヘクタールというのは、100 アールでしたね。」

「キロキロと」
・ ・ ・
五文字

「センチミリミリ」
・ ・ ・
七文字

覚えやすいように、
リズムを整えます



【編集部注】「デカメロン Decameron」は、1348～53 年に書かれたボッカッチョ (Giovanni Boccaccio 1313～1375) の小説『十日物語』です。10 人の男女がそれぞれに一日に一話ずつ 10 日間話すという構成で書かれています。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (66)

四四のリズム？

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんと話しています。

「覚えやすい口調というと、「水金地火木土天海冥」というのがありました。今は、冥王星が惑星からはずされたのだそうですけど……。」

「そう。これ、おもしろいのよね。スイキン、チカモク、ドッテン、カイマーって、四拍ずつ、いうでしょ。」

「そうですね、土天のところ、ドテンでは、ありませんね。」

じっかん コー オツ ヘー テー ホ キ コー シン ジン キ じゅうにし ね うし とら う たつ
「十干は、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸だし、十二支は、子・丑・寅・卯・辰・
み うま ひつじ さる とり いぬ い
巳・午・未・申・酉・戌・亥でしょ。語ごとに区切るだけなのに、惑星は四拍ずつなのよね。文部省唱歌の「ふるさと」が「うさぎ追ひし、かの山こふな。小鮎釣りし、かの川」という六四になっているのと同じように、ちょっと変わっているのよね。」



スイキン チカモク
水金、地火木、

ドッテン カイマー
土天、海冥

【編集部注】十干を「きのえ・きのと・ひのえ・ひのと・つちのえ・つちのと・かのえ・かのと・みずのえ・みずのと」と唱えることもあります。文部省唱歌の「ふるさと」は文語文なので、「追ひし」のところが旧仮名遣いになっています。「し」は体験の回想を表す助動詞「き」の連体形。口語では、「うさぎを追ったあの山、小鮎を釣ったあの川」です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (67)

ヨコメって？

タモツ君がおばあさんと話しています。

「おばあちゃん、ヨコメって、知ってる？」

「さあ、なんのことかしら。」

「教生の先生が、直線の直にヨコメで「おく」っていう字になるって教えてくれたんだ。」

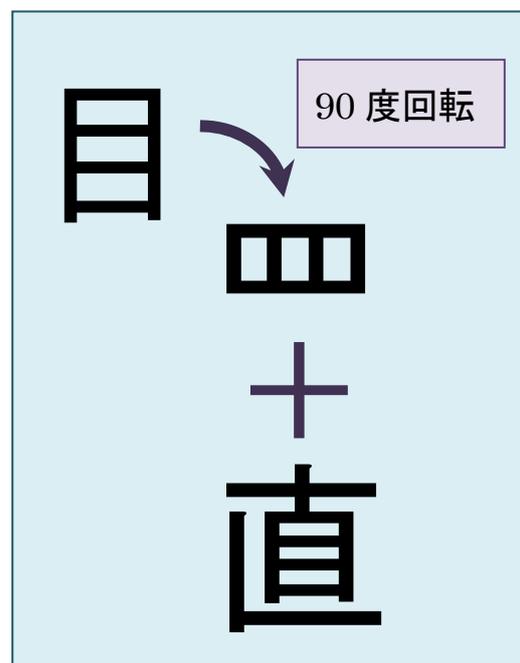
「ああ、そのヨコメなのね。タモっちゃんは、目という字は知ってるでしょう。」

「うん。1年のときにやったよ。」

「その目を横にするの。数字の四みたいになるでしょう。それが横目。」

「そうか。じゃ、「おく」っていう字は「置」なの？」

「そう。「ものおき」は「物置」って書くの。「おく」は「置く」。それから、ヨコメっていうのは、「あみがしら」とか「あみめ」とかいう名前のほうがふつうかな。」



【編集部注】

ヨコメというのは、印刷業界で用いる語のようです。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (68)

あみがしら

タモツ君は、おばあさんのところから帰ってくるなり、お父さんに言いました。

「お父さん、「ヨコメ」って「あみがしら」だって、知ってた？」

「部首のあみがしらは知ってるけど、ヨコメは知らない。」

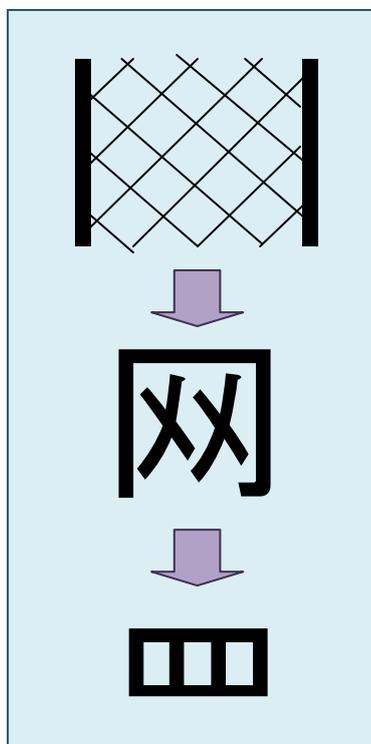
「おばあちゃんが、目を横にした形だからだって教えてくれたんだ。」

「そうか。でも、2年生では、そのヨコメの字なんか教わらないだろ。」

「うん。教生の先生が直線の直にヨコメで「置く」になるって教えてくれたんだ。」

「そうか。ヨコメは、もとは「网」なんだよ。二本の棒の間に糸を斜めに張り渡してあみにしたんだね。だから、罪とか罰とかあみで捕らわれることに関係のある漢字に使われているんだよ。」

「わかった！ あみが上のほうにあるから「あみがしら」なんだ。」



【編集部注】漢字を上下に二分して、上が冠、下が脚と名づけます。部首名には、この部分と組み合わせて、ウカンムリ(家室)・ワカンムリ(写冠)・クサカンムリ(草花)などと呼ぶ場合と、トラガシラ(虎虚)・ハツガシラ(発登)などと呼ぶ場合があります。「老・考・者」はオイカンムリともオイガシラともいわれます。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (69)

网と網

三年生になったタモツ君が隣の席のサユリさんに話しています。

「教生の先生が教えてくれた「ヨコメ」というのは、「あみがしら」なんだって。」

「あみがしら？」

「うん。辞書には「あみめ」という名前も出ていたよ。」

サユリさんは、すぐに辞書を開きました。そして、言いました。

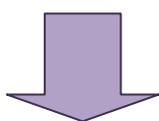
「タモっちゃん、「網」という字は中学生になったら習うんだね。」

「うわあ、「あみ」ってこんなむずかしい字なんだ。お父さんは「网」がヨコメになったって教えてくれたけど……」

「でも、ほら、「網」は、糸と网と亡でできているみたい。」

「そうなんだ！ ヨコメの外側の縦の棒が長くなっているんだね。」

糸 + 网 + 亡



網



【編集部注】「あみ」を意味する象形文字の「网」に、音を表す「亡」を加えたのが表外字の「罔」、さらに意味を表す「糸」を加えたのが常用漢字の「網」です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (70)

手と「てへん」、玉と「たまへん」

夕食のあと、タモツ君がお父さんと話しています。

「今日、サユリちゃんが辞書で「網」という字を見つけたんだよ。きのう、お父さんに「网」がヨコメになったって教わったけど、サユリちゃんは、「網」は糸と网と亡じゃないかって。」

「すごいね。糸と亡は見たままだけど、「あみがしら」のところは気づきにくいのにね。」

「うん。ヨコメの外側の縦の棒が長くなっているんだよね。」

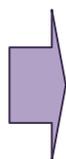
「部品になると形が変わるんだ。タモツは「てへん」って、知ってるかな。」

「3年生になったら教わる「指」とか「持つ」とかかな。」

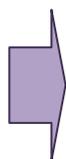
「そう。この「てへん」は「手」という字が偏になったんだ。一番上の片仮名の「ノ」のようところがなくなってるだろ。目玉の玉が偏になると、「へん」がなくなる。野球の球や真珠の珠が「たまへん」だよ。「王」に見えるけど「おうへん」じゃないんだ。」

網

手



寺



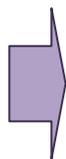
指

てへん

玉



王



球

たまへん



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (71)

学校の学は何かんむり？

タモツ君の隣の席のサユリさんが言いました。

「タモっちゃん、教室の室の「ウかんむり」や電気の電の「雨かんむり」はすぐにわかるけど、学校の学は何かんむりか知ってる？」

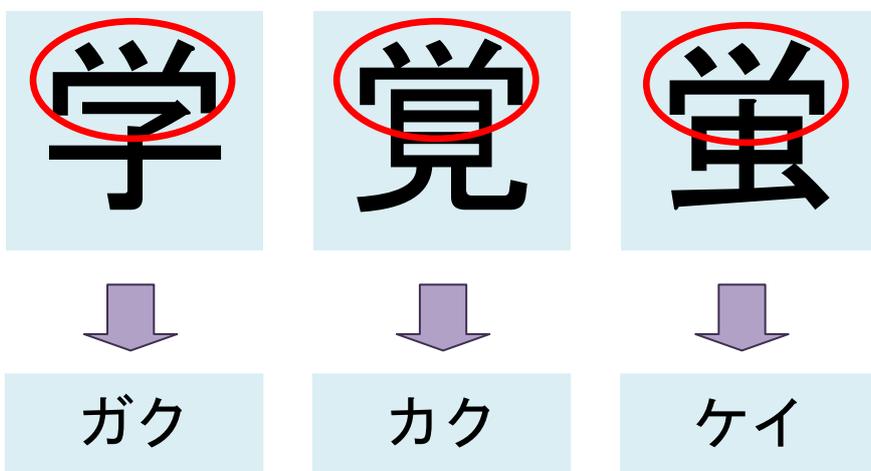
「前におじいちゃんにもらった辞書で調べたら、学校の学は「子」の部で、音を表すかんむりのところの名前は、出てなかったよ。」

「かんむりのところは音を表すの？」

「うん。4年生になったら習う自覚の覚のかんむりのところも音を表すんだって。学はガク、覚はカクだけど……」

「そうか。カクとガクは似てるけど、同じ形があるのに、蛍光灯の蛍はケイだよ。」

「そうだね。どうして、蛍がケイなのか、あとで調べてみようか。」



同じ形があるのに、音が違うわ

【編集部注】

漢字の部首分類で部首になるのは、多くが意味を表す部分です。部首には呼び名がありますが、音を表す部分には呼び名がありません。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (72)

どうして蛍の音はケイなの？

学校の帰りにおばあさんのところに寄ったタモツ君が言いました。

「学校でサユリちゃんに聞かれたんだけど、学校の学や自覚の覚と同じ形のところがあるのに、どうして蛍光灯の蛍はカク・ガクでなくて、ケイなんだろうって……」

「あらあら、たいへんなことに気がついたのね。学の子をとったところ、覚の見をとったところ、蛍の虫をとったところが同じなのよね」

「そう。学の子をとったところや覚の見をとったところが音を表すって、おじいちゃんにもらった辞書で調べたから知っていたんだけど……」

「そうよ。蛍の虫をとったところも音を表すの。今は同じになってるけど、もとは違っていたの。学は學、覚は覺だけど、蛍は螢だったの。四年生で習う榮^{さか}えるという字の榮、五年生で習う^{いとな} 営^{エイ}むの営が蛍と同じで、榮と營だったのよ。ケイとエイは似ているでしょ」



學・覺



学・覚



ガク・カク

螢・榮・營



蛍・栄・営



ケイ・エイ・エイ

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (73)

四月一日七五三男

中学生になったりサさんが学校から帰るなり、言いました。
「お母さん、中学に「四月一日」という人がいるの！ なんて
いうか、わかる？」
「あらあら、「ただいま」も言わないで、なんですか。」
「ごめんなさい。ただいま！」
「それで……。」
「そ。「四月一日」っていう人がクラスにいるの。」
「苗字だから、わたぬきさんでしょ。」
「どうしてわかるの。この人すごい。「四月一日七五三男」
っていうの。」
「あら、ほんと。綿入れの着物から綿を抜いて あわせ 袷あわせにする衣替
えの日だから、四月一日で綿貫わたぬきなんだけど、お名前が七五三繩しめなわ
のしめというのは、驚きね。数字がお好きなのかしら。」



四月一日

七五三男



わたぬき



???

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (74)

八月一日

夕食後です。中学一年生のリサさんがお父さんに言いました。

「お母さんには話したけど、中学校の私のクラスに四月しがつ一日七五三男ついたちしちごさんおとこって人がいるの。なんていうか、お父さん、わかる？」

「わたぬきしめお、だろ。」

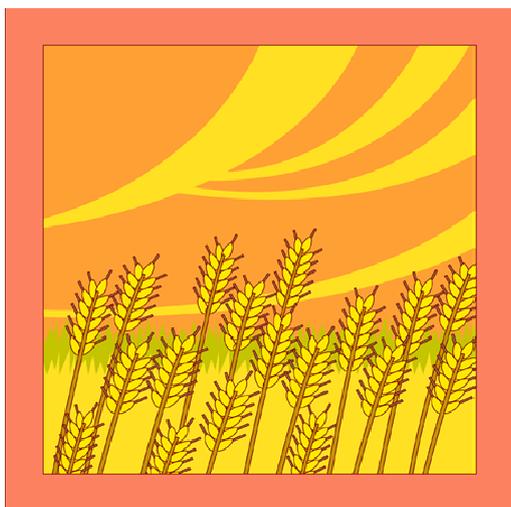
「どうしてわかるの？」

「人の名前だっていうから、わかる。そうでなければ、五輪がオリンピックと読まれるように、四月一日がエイプリルフールだったかもしれない。」

「そうなんだ。四月一日でわたぬきさんっていうの、リサたちが知らないだけだったんだ。」

「苗字では、八月一日というのもあるんだよ。」

「稲穂を摘んで神に供える日だから、ほづみさんっていうのよ。」と、お母さん。



八月一日



ほづみ

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (75)

ブックと book

夕食が済んで、中学一年生のリサさんがお父さんと話しています。

「お父さん、book はブックでしょ。」

「うん。本屋さんは bookshop。」

「残念でした。本屋さんは bookstore。」

「そうか。リサたちの英語はアメリカ英語なんだ。」

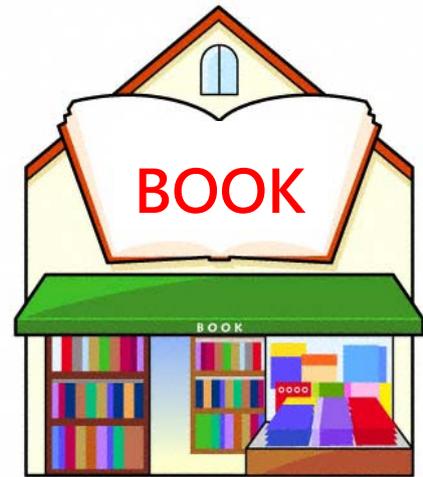
「イギリスの英語とアメリカの英語は違うの？」

「うん。アメリカ英語だと、ふつうは bookstore、
小さな本屋が bookshop かな。」

「そうなんだ。でも、リサが聞きたいのは、book
がブックじゃないってこと。先生に注意されたんだ。

ブックじゃなくて**ブック**だって。」

「ああそうか。日本語のウと英語のウは違うからね。」



bookshop



bookstore



【編集部注】

英語のウ [u] は、舌が奥のほうに引かれ、唇が丸くなって突き出されますが、日本語のウ [u] はそうなりません。ただし、京都地方のウは英語に近いといわれます。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (76)

「これは何ですか。」と “What is this ?”

夕食後、中学1年生のリサさんがお父さんに言いました。

「“This is a pen.” が疑問文だと “Is this a pen?” になるのよね。」

「そう。主語と be 動詞の位置が逆になる。」

「そうよね。変なのは、「これは何ですか。」が “Is this what?” にならないこと。」

「それは、疑問詞があるからだろ。「あなたはだれですか。」だって、“Who are you?” だし、「あなたはどこへ行くのですか。」だって、“Where do you go?” なんだから。」

「うん。でも、変だと思うなあ。」

「英語と日本語では文法が違うから、しょうがないんだよ。」

お母さんが言いました。

「疑問詞を先に “What is this?” というのは、「何？これは。」という感じじゃないの。」



This is a pen.

Is this a pen ?

~~Is this what ?~~

What is this ?

【編集部注】

英単語の一つひとつに日本語をあてはめて考えるのは望ましくないのですが、文法の違いだと片づけるよりお母さんのように考えると親子の会話が弾むことでしょう。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (77)

「峰」と「峯」

週に一度の祖父母を交えての夕食が済んで、タモツ君が言いました。

「おじいちゃん、今度の担任のみねぎし先生の「みね」っていう漢字は、みねむら君の「峰」ではなくて「峯」なんだよ。」

「そうか。やまかんむりの^{みねぎし}峯岸先生とやまへんの^{みねむら}峰村君か。」

お父さんが言いました。

「そういえば、今日、会社にやまかんむりの^{しまむら}巒村さんという方がいらしたよ。」

「やまへんの^{ながしま}嶋は長嶋さんで見たことがあるけど、巒村は珍しいね。」とおじいさん。

「友だちの^{たかしま}高島君の島と違うの？」とタモツ君が聞きました。おばあさんが言いました。

「高島君の島も山と鳥なんだけど、鳥のてんてんがなくなっているのね。むずかしいことば^{いたいじ}だけど、こういうのを異体字っていうのよ。」

みね
峰

みね
峯

^{いたいじ}
異体字って
言うんだって！

しま
巒

しま
嶋

しま
島



【編集部注】

桑と桑、邊と邊、柳と柳と柳などの異体字とは異なり、峰と峯、島と嶋と巒などは、同じものがどこに用いられるかの違いだけであるということで、とくに^{どうようじ}動用字と呼ばれることがあります。群と羣、松と叢、略と畧、朗と膈なども動用字の例です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (78)

「含」と「吟」

おばあさんの家でタモツ君が言いました。

「この間、峯岸先生の峯と峰村君の峰が同じだし、高島君の島と鳶村さんの鳶と長嶋さんの嶋が同じだって教わったけど、使うものが同じなら、へんとかつくりとかかんむりとかあしとか、どこに使われていても、同じ字なの。」

「そうねえ。タモっちゃんは「犬」と「太」とが別の字だって知っているでしょ。」

「うん。今は同じ、だけど、耳が、^がんになったのと二が、^ぎんになったのだったよね。」

「よく使う漢字では、「ふくむ」の「含」と、歌うように声を出す「吟」というのがあるわね。わきの下の「脇」と、「おびやかす」の「脅」、むずかしいことばだけど、みかんなどの柑橘類の「柑」と、「はっきりわからない」という意味の「某」^ぼう。そんなに多くはないようだけど、使うものが同じでも違う字になることもあるわね。」

が ん

含

≠

ぎ ん

吟

使うものが同じでも
違う字になることもあるの。

脇

≠

脅

か ん

柑

≠

ぼ う

某



【編集部注】

「犬」と「太」については、この「ことばのコラム」のバックナンバー1「犬という字の、は耳だったんだよ」をご覧ください。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (79)

「ごみを分別する分別がある？」

中学一年生のリサさんが学校から帰るなり、お母さんに紙片を見せて言いました。

「お母さん、これ、何て読む？」

「ブンベツでしょ。」

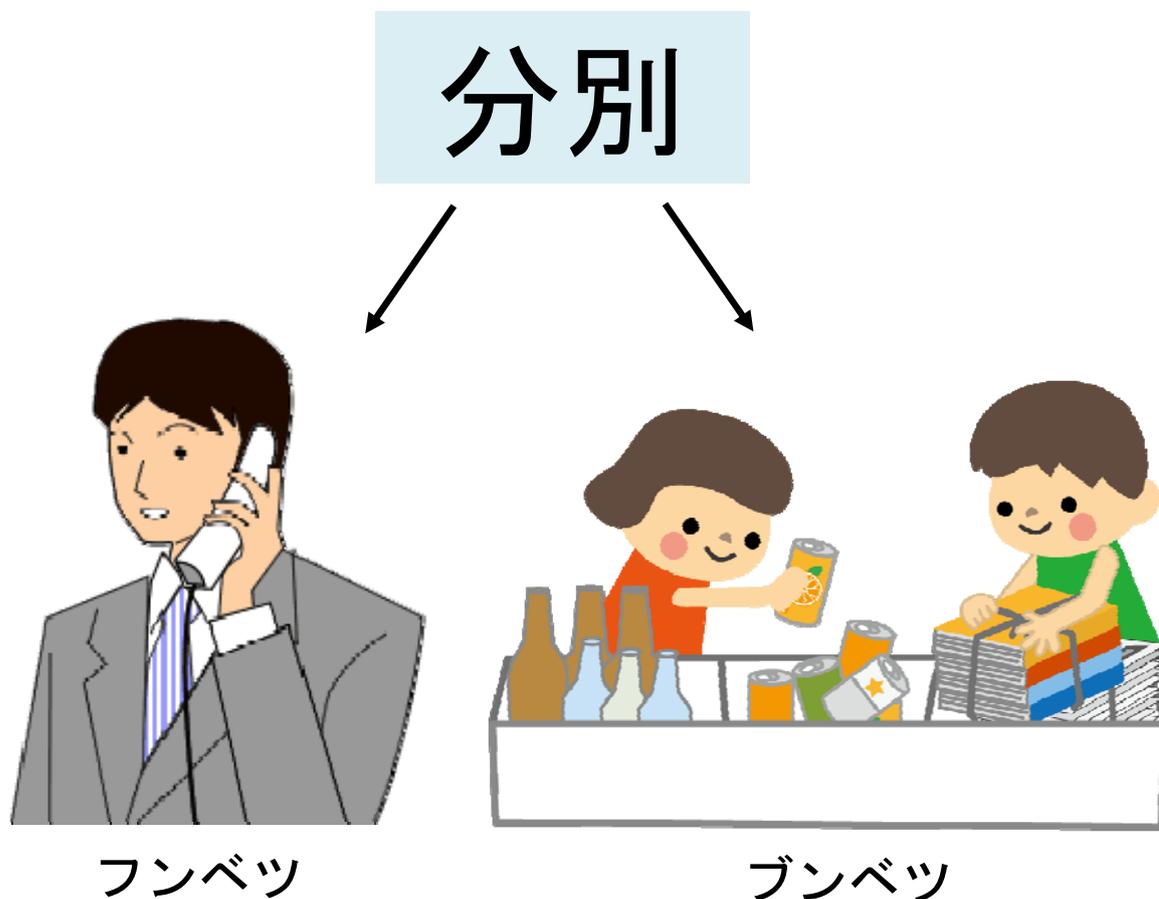
「そうよね。でも、フンベツなんだって。」

「ああ、そうか。そちらのほうね。」

「そちらのほうって？」

「ごみを種類ごとに〈別別に分ける〉などというときには、ブンベツだけど、フンベツがあるとかないとか〈一人前の社会人としての理性的な判断〉という意味のときはフンベツなの。」

「ふーん。意味が違うと、読み方も違うのか。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (80)

「フンベツ顔は似合わない。」

夕食のあと、デザートを食べながら、中学1年生のリサさんがお父さんに言いました。
「今日、お母さんに教わったんだけど、分別をフンベツと読むこともあるって、お父さん、知ってた？」

「なにもかもわかっているといったフンベツ顔は、リサには似合わないよ。」

「へー、そんな使い方もあるんだ。」

「フンベツくさい言い方をすると、ごみのブンベツなど〈別別に分けること〉という意味で使うのは、最近になってからだと思うけど、辞書には15世紀の用例が出ているよ。」

「フンベツ顔とかフンベツくさいとか、あまりいい感じじゃないみたい。」

「フンベツということばそのものにはいいもわるいもないけど、〈顔〉とか〈くさい〉とかがつくと、そんなニュアンスのことばになるね。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (81)

夏日・真夏日・猛暑日

朝です。郵便受けに新聞を取りに出た小学三年生のタモツ君が叫びました。

「風が冷たい！」

ごみを集積場に置きに行ってきたお母さんが言いました。

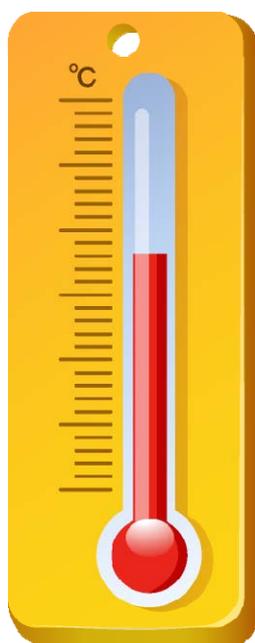
「そう、もう秋なの。」

「このあいだまでは、暑かったのにね。」

「夏日、真夏日、猛暑日……。猛暑日が続いたのよね。」

「最高気温が 25℃以上の日が夏日で、30℃以上の日が真夏日だって知ってたけど、35℃以上の日が猛暑日だなんて、知らなかった。」

「お母さんも知らなかったなあ。夜になっても外気温が 25℃以下にならない夜が熱帯夜だというのは、聞いていたけれど……」



猛暑日

35℃ ———

真夏日

30℃ ———

夏日

25℃ ———



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (82)

「風が冷たい！」

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんと話しています。

「おとといの朝、タモツが新聞を取りに出て、「風が冷たい！」って、叫んだんです。」

「そう。おとといの朝は、涼しさを通りこして、寒いくらいでしたものね。」

「そうなんです。だから、「風が冷たい！」っていうのが、実感だったのですけれど、気になったのは、「風は冷たい。」とも言うことがあるのにつて……」

「あらあら、たいへんなことが気になったのですね。」

「あんなときには、「風は冷たい。」とは言えませんよね。」

「言えませんね。今、肌に触れた風について、「冷たい！」と叫ぶのですから。場面を限定しないで風というもの的一般について言う場合とか、ほかのなにかと比べて風だけについて言う場合でしたら、「風は冷たい。」と言えるのでしょけれど……」



【編集部注】

日本語の基本となる文には、「①ナニガドウスル。花が咲いています。②ナニハドンナダ。花は美しいです。花はきれいです。③ナニハナニダ。この花は菊です。④ドコニナニガアル。庭に花壇があります。」の4種類があります。述語が形容詞（美しい）や形容動詞（きれいだ）になる場合には、主語が「ナニハ」になるのが基本ですが、現在の状況を描写する場合には、「風が冷たい。」のように、主語が「ナニガ」の形になります。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (83)

「私が長谷川です。」

タモツ君のおばあさんがタモツ君のお母さんと話しています。

「和子さんは、芥川龍之介の『手巾』^{はんけち}をお読みにになったことがありますか。」

「ええ、お子さんを亡くしたお母様がお世話になった先生のところへ伺って、息子さんの亡くなったことを、微笑を浮かべて淡々とご報告なさりながら、テーブルの下ではハンカチがちぎれるくらいに握り締めているって話ではありませんでしたか。」

「そう。応接室に通されたお母様のところに、長谷川先生がお見えになって、『私が長谷川です。』って、名乗るでしょう？」

「そうでしたか。会話までは、覚えてませんわ。」

「ふつうの自己紹介なら、『私は長谷川です。』と言うのですけれど、あの場面では、『あなたのお訪ねの長谷川は私です。』っていうことだったの。それで『私が長谷川です。』なの。」



私が長谷川です。

私は長谷川です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (84)

「長谷川は私です。」

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんと話しています。

「芥川龍之介の『手巾』^{はんげち}で、先生が『私が長谷川です。』と名乗ったのは、『長谷川は私です。』
ということなのですね。」

「そう。長谷川先生をお訪ねしたのですから、お母様には、応接室に現れた人物が長谷川先生であることはわかっているのよね。だから、自分がその長谷川だと名乗ればよいの。」

「『長谷川は私です。』が『私が長谷川です。』になるっていうのがおもしろいですね。」

「おもしろいわね。そうそう、あの場面で、お母様は『私は、西山憲一郎の母でございます。』
と名乗るの。」

「そうでしたか。長谷川先生には、訪問者がどういう人物かわからないのですから、ふつうの自己紹介の言い方で、そう名乗られたのですね。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (85)

「神様」の「神」

タモツ君の隣の席のサユリさんが言いました。

「さっき、「神様」の「神」っていう字、習ったね。」

「うん。シメスヘンに、前に習った「申し上げる」の「申す」の「申」って書くんだった。」

「うん。同じ「かみ」だけど、「かみのけ」の「かみ」って、どんな字？」

「知らない。まだ、習っていないよ。紙くずの「かみ」なら、二年で習ったけど。」

「そうか。」

「あ、辞書で調べてみたら。」

「そうね。……あった！ こんな字なんだ。長いの長にサンヅクリに友だよ。」

「そうか、中学で習うんだ。サユリちゃん、これ、長いじゃないよ。「長」だよ。」

「あ、ちがうね。部首は「髟」だって。じゃ、音は「友」なのに、ユウじゃないね。」

「**髪**」の部首は
さん
「**髟**」なんだね



【編集部注】サユリさんは、漢字を部首になる部分と音を表す部分とに分けて
見ることができます。部首になる部分は、意符になることが多いのです。

「髪」は、部首が冠の部分の「髟」なので、脚の部分の「友」が音符であると
考えたのです。なお、「長」は、常套句・常套手段の「套」にも用いられて
います。オーバーコートは外套です。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (86)

髟十友二髪？

学校の帰りにおばあさんのところに寄ったタモツ君が言いました。

「学校で「神様」の「神」という漢字をやったから、サユリちゃんと辞書で「かみのけ」の「髪」という字を調べたんだけど、「髟」の部で、音符は「友」なのに、「友人」とか「親友」とかっていうときのユウじゃないのは、どうしてだろうって。」

「あらあら、すばらしいことに気がついたのね。確かに、「髪」という字は、「長」と「彡」と「友」とでできているように見えるわね。」

「うん。」

「学校で使っている辞書には、もとの字が載っていなかった？ 「髪」という字は、もとは「髮」だったの。今は「友」になっているところが「𠂔」だったの。だから、ユウでなく、ハツなの。中学で習う「選抜」の「抜」も、もとは「𠂔」だったの。だから、バツ。」

「友」になっているところは
𠂔
「𠂔」だったのよ

髮 → 髮

𠂔 → 𠂔



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (87)

「仮」と「假」

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「今日、タモツがおばあちゃんに教わったって、頭髮のハツ、選抜のバツは、今は「友」になっているけど「友」だったところの音なんだって……」

「そう。字体の整理でへんなことになっちゃったんだね。すごいのがあるよ。「假定」のカ。この字は、ニンベンに「反」だよ。音符としての「反」は、急坂のハン、合板のハン、黒板のバン、版画のハン、販売のハン、御飯のハン、返還のヘン……。だから、ハン・バン・ヘンだろ。ところが、「假定」はカ、「仮病」はケ。へんじゃない？」

「「假定・仮病」の「仮」は、もとは「假」だったのよね。」

「なんだ、知ってたのか。そうなんだ。ひまという字は「暇」のままなのに、かりは「仮」にしちゃったんだ。かすみは「霞」だし、玉にきずのカキンは「瑕瑾」だよ。」

急坂、合板、黒板、版画、

販売、御飯、返還…

假定、仮病



假 → 仮

【編集部注】「暇・霞・瑕」の音符は「段」です。「休暇・余暇」の「暇」は常用漢字表に収められていますが、「霞」や「瑕」は収められていません。「春霞」の「霞」は、「雲霞の如き大軍」のように、訓の「かすみ」だけでなく、音も用いられます。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (88)

「仏」と「沸」

子どもたちの寝静まったあと、タモツ君のお父さんとお母さんが話しています。

「私、中学生のころ、へんだと思っていたの。仏教の「仏」はもと「佛」だし、払底の「払」はもと「拂」でしょ。「弗」が「ム」になってるのに、沸騰の「沸」はサンズイに「ム」とは書かないでしょ。」

「ぼくなんか、漢字の書き取りテストで、「せいだくあわせのむ。」というのの「せいだく」の「だく」をサンズイに「虫」と書いて×になったことがあるよ。」

「そうか、独立の「独」はもと「獨」だったんだもんね。」

「うん。まだあるよ。酔眼朦朧のスイは「酔」、純粹のスイは「粹」、粉碎のサイは「碎」。だから、「卒業」のソツを「卒」と書いたら、×。ソツは「卒」のままだった。」

「もとは酔眼・純粹・粉碎だったって知ってるなんて、教養がありすぎたのよ。」

佛 → 仏
拂 → 払

酔 → 酔
粹 → 粹
碎 → 碎

沸 × 汧

卒業 × 卒業



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (89)

いろはにほへと

小学校3年生のタモツ君の隣の席のサユリさんが言いました。

「タモっちゃん、いろはにほへとって、知ってる？」

「知らない。ちっちゃいとき、いろはにこんぺーとーって行ってたけど……」

「そう、そうって遊んだよね。神社の石段のところで……。」

「それが、いろはにほへと、なの。」

「そうなの。きのう、お父さんが教えてくれたんだけど、同じひらがなが一度しか使われな
いように、平安時代というときに、作られたんだって。書くと、こんなの。」

いろはにほへと ちりぬるをわか よたれそつねな らむうゐのおく

やまけふこえて あさきゆめみし ゑひもせす

「イと読む「ゐ」とか、エと読む「ゑ」なんて、へんなひらがながあるでしょ。」

いろはにほへと ちりぬるをわか よたれそつねな らむうゐのおく

やまけふこえて あさきゆめみし ゑひもせす



同じひらがなが
一度しか使われないのね

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (90)

いろは歌

学校の帰りにおばあさんのところに寄ったタモツ君が言いました。

「学校でサユリちゃんに教わったんだけど、いろはにほへと……って、同じひらがなが一度しか使われないように、作ったのがあるんだって。」

「そう。いろは歌ね。」

「え、歌なの。」

「そう、歌。『色は匂へど、散りぬるを、我が世たれぞ、常ならむ。有為の奥山、今日越えて、浅き夢見じ、酔ひもせず』っていうの。むずかしい歌だけど、花は美しく咲き香るけれど、散ってしまうものなのに、人の一生だれが永遠であろうか、だれもが死ぬものなのだ。浮き沈みの多い人生、なんとか今日一日は乗り越えたが、こんな日が続くという浅い夢は見ないつもりだし、いい気になって酔ったりもしない、というようなことね。」

色は匂へど 散りぬるを
我が世たれぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて
浅き夢見じ 酔ひもせず

いろは歌、
というのよ



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (91)

いの一番

週に一度の祖父母を交えての夕食が済んで、タモツ君が言いました。

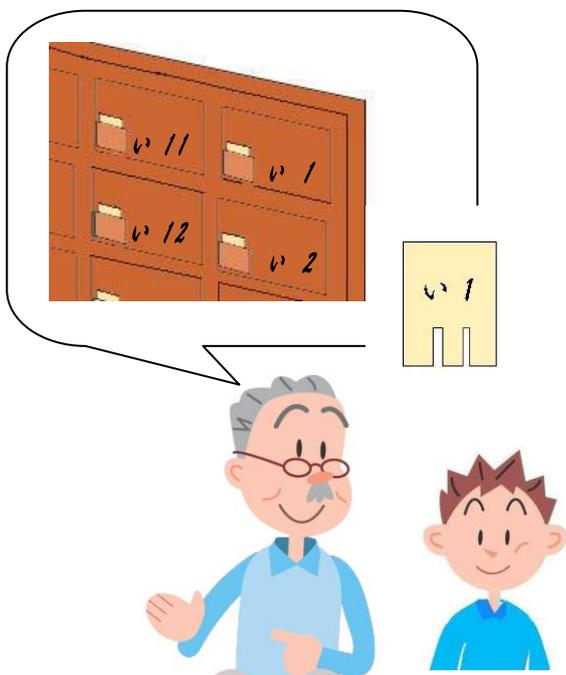
「学校でサユリちゃんに教わって、おばあちゃんに聞いたんだけど、いろは歌って、おじいちゃんも知ってる？」

「そりゃ、知ってるさ。おじいちゃんの子どものころには、お風呂屋さんの下駄箱には、い・ろ・は・に……って書いてあったよ。「い」が右上の最初で、「いの一番」さ。」

「いろはにほへとってというのは、「色は匂へど」だって、おばあちゃんが……」

「うん。でも、ものの順番に使うときは、いろはにほへと、ちりぬるをわか、よたれそつねな……っていうように、七つずつに区切って言ったようだよ。」

「七つ目のかなを順に読むと、とかななくてす。歌舞伎の仮名手本忠臣蔵の仮名手本というのは、いろは歌四十七文字のことで、^{とが}咎無くて死すの四十七士のお話なのね。」



いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうゑのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

↓

^{とが}咎無くて死す

An illustration of a samurai in traditional attire, standing with a sword.

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (92)

仮名手本

週に一度の祖父母を交えての夕食のあとです。タモツ君が言いました。

「おばあちゃん、歌舞伎の仮名手本忠臣蔵って、何？」

「あこう赤穂の四十七人のお侍さんが、切腹したお殿様のかたきであるきら こうずけのすけ吉良上野介を討つというお芝居ですよ。」

「そのお芝居の名前が仮名手本忠臣蔵なの？」

「そう。忠臣蔵だけでもよいのだけれど、キャッチフレーズのように、小さな字で二行にして「仮名手本」と書くの。角つのみたいいに見えるから、「角書き」っていうの。」

「その角書きの「仮名手本」というのが、いろは歌のことなの？」

「そう。江戸時代には、仮名を習うときのお手本がいろは歌だったの。「い」から「す」まで順番に書いて、仮名を覚えたのね。」

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうるのおく
...



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (93)

あめつちの^{ことば}詞

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんと話しています。

「先日、お義母さまはタモツに、江戸時代には、仮名を習うときのお手本がいろは歌だったと、おっしゃってらしたのですけれど、それ以前はどうだったのでしょうか？」

「平安時代には、あめつちの^{ことば}詞 というのがあったんですよ」

「ああ、「あめつちほしそら」というのでしたっけ？」

「そう。天地玄黄、宇宙洪荒で始まる中国の千^{せん}字^じ文^{もん}にならったといわれる手習^{てならい}詞^{ことば}ね」

「あめつちほしそら、やまかはみねたに、くもきりむろこけ、ひといぬうへすゑ……。ここまでは思い出せるのですけれど……。」

「さすが、タモっちゃんのお母さん。あとは、「ゆわさるおふせよ、江の衣をなれゐて」で、江はエ、衣はイエなのだけど、意味がよくわからないのよね。」

宇 宙 洪 荒	天 地 玄 黄	日 月 盈 昃
------------------	------------------	------------------

千字文

…

榎 の 枝 を 馴 れ 居 て	硫 黄 猿 生 ふ せ よ	人 犬 上 末	雲 霧 室 苔	山 川 峰 谷	天 地 星 空
--	-------------------------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

あめつちの詞

【編集部注】「千字文」は、中国六朝の梁の周興嗣が武帝の命を受けて撰した、

4字1句、250句、1000字から成る韻文です。「あめつちの詞」は、ふつう、「天

つちほしそら やまかはみねたに くもきりむろこけ ひといぬうへすゑ ゆわさるお え イエ な ゐ
地星空、山川峰谷、雲霧室苔、人犬上末、硫黄猿生ふせよ、榎の枝を馴れ居て」

の意とされています。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (94)

い ために歌

タモツ君のお母さんがタモツ君のおばあさんと話しています。

「あめつちの詞^{ことば}では、エとイエの区別があるので、いろは歌より一字多いのですね。48の
かなが全部出てくるのですから、手習にはよかったのでしょうけれど、単語を並べただけの
ようで、覚えにくいですね。」

「そう。それで、歌にすることが考えられたのね。ために歌^いというのがあるのよ。」

「ために歌？」

「そう。「ためにいて、なつむわれをそ、きみめすと、あさりおひゆく、やましろの、うち
ゑへるこら、もはほせよ、えふねかけぬ」というの。五七調の歌で「田居に出で、菜摘む我
をぞ、君召すと、あさり追ひ行く、山城の、うち酔へる子ら、藻葉干せよ、え船繫けぬ」と
いうことのようなね。」



田居に出で 菜摘む我をぞ
君召すと あさり追ひ行く
山城の うち酔へる子ら
藻葉干せよ え船繫けぬ



【編集部注】「ために歌」は、^{みなもとためのり}源 為憲の『口遊』^{くちずさみ}(970年)に見られます。第
四句は「安佐利比由久」とあるのですが、意味から「お」を補います。エとイエ
の区別のなくなった47文字と考えられますが、もとはオとヲ、エとイエの区別
もあつたもので、『口遊』では、オとエを省いたのではないかと推測する研究者
もいます。

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (95)

目がくらむ

久々の休みでドライブをするというお父さんに誘われて、中学1年生のリサさんは、車に乗り込みました。お母さんも一緒です。早朝の高速道路を走って、あっという間に、郊外に出ました。2時間走ったからと、路肩に車を止め、3人で少し、歩きました。

「わ、すごい！」

リサさんが大声を挙げました。高速道路の左手は切り立った崖で、ずっと下のほうに水の流れが見えるのです。

「目がくらむよね。」と、お母さんが言いました。

「目がくらむ？ 目がまわるじゃないの？」と、リサさんが言いました。

「あら、目がくらむって、目がくらくらするってことじゃなかった？」と、お母さん。

「それは、目くるめくだろ。」と、お父さんが言いました。



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (96)

目くるめく

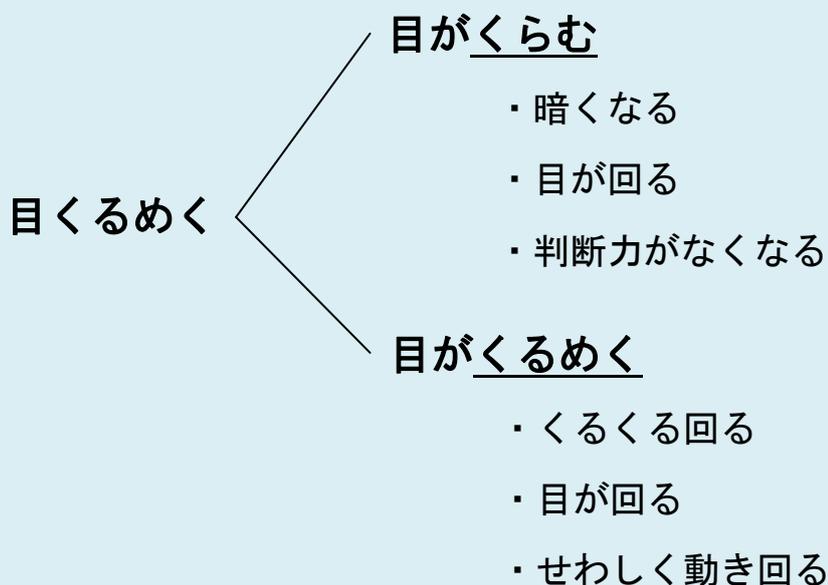
お父さんが運転する休日のドライブの車に戻って、中学1年生のリサさんは、いつも持ち歩いている電子辞書で調べました。

「お母さんが言った「目がくらむ」の「くらむ」って、「暗くなる」という意味と「目が回る」という意味と「判断力がなくなる」という意味なんだって。」

「そう。やっぱり「くらくらする」って意味もあるのね。」

「うん。それから、お父さんが言った「目くるめく」は、「目がくるめく。目がくらむ」なんだって。「目がくらむ」と同じなんだよ。「目がくるめく」の「くるめく」は、「くるくる回る。目が回る。せわしく動き回る」って意味だって。」

「そうか。「目くるめく」の「くる」は、回るようすの擬態語「くるくる」の「くる」で、それに接尾語の「めく」がついたと見当がつくけど、「くらむ」とも言ったんだね。」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (97)

うめく・わめく

お父さんが運転する休日のドライブの車中です。リサさんが言いました。

「お父さん、「目くるめく」の「めく」って、接尾語なの？」

「うん。名詞の「春」に付くと「春めく」。擬声語の「う」に付くと「うめく」、「ざわ」に付くと「ざわめく」。擬態語の「きら」に付くと「きらめく」……」

「ちょっと、「うめく」って、「う」が擬声語？」

「そう。「う」って声を出すのが「うめく」。「わ」って声を出すのが「わめく」。」

お母さんが言いました。

「そう言えば、平家物語だったかに、「をめく」って、あったわね。」

「ウォーって声を出すってこと？」と、リサさん。

「そう。古典には、「あめく」っていうのも、あるよ。」と、お父さん。

接尾語

春	+	めく	=	春めく
う	+	めく	=	うめく
ざわ	+	めく	=	ざわめく
きら	+	めく	=	きらめく
わ	+	めく	=	わめく



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (98)

をめく・あめく

お父さんが運転する休日のドライブの車中です。お母さんとお父さんのことばを聞いて、電子辞書を見ていたりサさんが言いました。

「お母さんの言った「をめく」は、枕草子にあるんだって。82段の「うち見たるにあはせてをめけば」が出てる。」

「へー、そうなんだ。平安時代から使っていたのね。確か、「源氏の勢六千余騎、川を渡いて、平家三万余騎が中へをめいて駆け入り」とかいうのを読んだ記憶があるけど……」

「そう。平家物語の巻六だろ。」と、お父さん。

「お父さんの言った「あめく」は、宇治拾遺物語にあるんだって。巻五の「大衆、異口同音にあめきて」が出てる。」

「それこそ、枕草子の「にくきもの」の段に、「酒のみてあめき」というのがあるよ。」

をめく

枕草子 82 段…「うち見たるにあはせてをめけば」

平家物語巻六…「源氏の勢六千余騎、川を渡いて、
平家三万余騎が中へをめいて駆け入り」

あめく

宇治拾遺物語巻五…「大衆、異口同音にあめきて」

枕草子「にくきもの」…「酒のみてあめき」



このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにでも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (99)

くらくらする・くらむ

お父さんが運転する休日のドライブの車中です。中1のリサさんが言いました。

「お父さん、さっきの「くらむ」って、「くらくらする」って意味もあったでしょ。「くらむ」の「む」も接尾語なの？」

「うん、そうじゃないかな。「いきむ」とか「りきむ」とかいう動詞があるだろ。「いきむ」は和語の「息」に「む」が付いたものだし、「りきむ」は漢語の「力」に「む」が付いたものだから。」

「ふーん。「息」も「力」も名詞だけど、「くらむ」の「くら」は、「くらくらする」の「くら」だから、擬態語だよな。」

「そう。だから、ちょっと気になる。「赤む・青む・黒む・白む」ってことばがあって、「白む」には「しらむ」ってことばがある。「くらむ」も「黒む」と関係があるのかな。」

関係あるのかな?

		接尾語			
息	+	む	=	いきむ	
<small>名詞</small>					
力	+	む	=	りきむ	
<small>名詞</small>					
くらくら	+	む	=	くらむ	
<small>擬態語</small>					

赤む 青む

黒む 白む

しらむ

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (100)

しろむ・しらむ

家族ドライブの車中で、中1のリサさんは、運転するお父さんと話しています。

「ね、お父さん、「夜が明けて、東の空が白んできました。」なんて言うから、「しらむ」はわかるけど、「しろむ」なんて、聞いたことがないよ。」

「古典には出てくるけど、現代語では使わないかな。」

「でも、「はなしろむ」って、言うじゃない？」と、お母さん。

「さすが！ そうだよな。「鼻白む」は、使うよね。」と、お父さん。

「ね、「鼻白む」って、どういうこと？」と、リサさん。

「そのまんま「鼻が白くなる」ことだけど、「興味なさそうな顔つきをする」とか「気後れした顔つきをする」とかっていうこと。」と、お母さん。

「ふーん。「鼻が白くなる」は、「鼻しろむ」で、「鼻しらむ」ではないんだ。」

鼻白む (はな~~しら~~む)

鼻白む (はなしろむ・はなじろむ)

…鼻が白くなる

…興味なさそうな顔つきをする

…気後れした顔つきをする

